

交差保育法の実践（その五）



宮沢キヨ子・大塚朝子
佐藤佳代子・相楽幸子
指導 大戸美也子

三 交差保育の展開

二つの幼稚園の子どもたちが出会って、一つの融合集団を形成する過程、新しく生み出された集団を基盤に展開する活動を見ながら、交差保育の展開をとらえてみよう。

出会い

園舎前の広場に集まったとき、すっかり興奮しきっていた子どもたちも、幼稚園ごと、クラスごとに集まったり列を作っている間にようやく落ちつきをとりもどしてくる。子どもたちは、お互いの顔がよく見えるようにだ円形状に並び、担任の先生はクラスの子どものうしろに立つ。そして、全体をとらえて動く宮沢先生は、ザベリオと富田の子どもたちを引きあわせる仲介

の役割をとるので、二つの集団の境目に立つ。

「それでは——みんなでごあいさつしましょう。ザベリオ幼稚園のお友だちから富田幼稚園のお友だちへごあいさつしましょう」

「ごきげんよう」

「富田幼稚園のお友だちからザベリオ幼稚園のお友だちにごあいさつしましょう」

「こんにちわ」

「きく組のみなさん。そして朝子先生、ジーゼル先生、よくいらっしやいました。富田幼稚園のお友だちは毎日毎日、みなさんをお待ちしておりましたよ」

宮沢先生は、円の中に入り、きく組の子どもの顔をひとりひとり見ながら明るい大きな声で話しかける。

「どのようにして待っていたか聞いてみましょうか？」

今度は、きく組のうしろにまわり、富田の子どもたちと対面できる位置に移動して

「小さい組のスマイレさん。ちょっと手をあげてください」

スマイレ組の子どもたちは、全員背のびするように高く手をあげる。

「スマイレ組の恵美子先生、どんなふうに待っていましたか？」

スマイレ組の先生は、今朝から松ぼっくりに色をぬって、きく組のお友だちのプレゼントを作りながら待っていましたと、やや緊張しながら話す。

「おーい。大きい組のレンゲさん！」

「はーい、レンゲさんですよ」

先生も子どもたちもうれしそうに手をあげる。

「レンゲ組の相楽先生、いかがでしたか？」

相楽先生は、レンゲ組はここからここまでだと確認するように、レンゲ組の間を行ったりきたりしながら話す。

「レンゲさんはね、ザベリオのお友だちが迷わないで来れるように地図を一生懸命書きました。それからね、朝『先生、私ゆうべお星さまいっぱい出ているの見たから、きょう晴れるのわかってたよ』なんて楽しみにしていた人や、朝幼稚園にきてザベリオのお友だちに首飾りを作るお友だちもいました」

「次は、大きい組のタンポポさんです。おーい、タンポポさん！」

「はーい」
一斉に手をあげる。

「今、手をあげている人たちがタンポポさんです。タンポポさんは、お手紙をよんだり、二十九日は雨が降らないといいねって空をみたり、ぼくたちより背が大きいかな、どんな顔しているかなって話しながら待っていましたよ」

先生方は手紙や作品を通して、ザベリオの子どもと共通理解できていることに触れながら、自分のクラスの子どものようすを伝えていく。どの子どもも熱心にきいている。

「富田幼稚園には園長先生もいらっしやいます。園長先生！」

「ハイッ」と手をあげながら大きな声で返事をする。

「今日はよく来ましたね。お友だちと一しょに元気にあそんでください」

「あと、私がおながが太っていますけど、スマイレ組のキヨ子先生です」仲介役の宮沢先生が自己紹介する。

「今度はザベリオのお友だちに聞いてみましょうね。ザベリオきく組さん。朝子先生どんな風に待ってきましたか？」

大塚先生は、毎日今日を楽しみに待ってきたこと、バスにのってきたこと、そして、道に迷って困ったことなどを話す。最

後にジーゼル先生の番になると富田の子どもはざわめくが、「ドコノクニノガイジンデシヨウ？」と日本語で話しかけたので皆一安心する。

「今日はお天気がよくてよかったですね。富田幼稚園のお庭には小さい山がありますが、裏には大きな山があります。そのお山には、きれいな葉っぱやどんぐりや松ぼっくりが落ちていきますよ。どんぐりや松ぼっくり、落ち葉をひろって、ザベリオのお友だちと富田のお友だちが仲よく一日をすごしましょう」

全体のあいさつを終えると、ザベリオの子どもは荷物をおき、スモックに着替える。この間、富田の子どもたちは、スマイレ組はクラスに戻り、レンゲとタンポポはそのまま庭に列を作って、ザベリオのお友だちが戻ってくるのを待つ。ザベリオの子どもは荷物をおき、スモックを着て庭に戻ると、順にレンゲ・タンポポの子どもたちと手をつないでいく。物置き場には宮沢先生と大塚先生、庭でまつレンゲ・タンポポにはそれぞれの担任の先生がついて、子どもたちのお世話をする。みんながそろうまでに、お手洗いに行きたい人は、富田の子どもにも案内してもらってトイレに行く。

園庭を一緒に見る

「それでは、これから富田幼稚園のお庭を案内します」

レンゲグループはレンゲ組の相楽先生が先導し、きく組の大塚先生がつき、タンポポグループはタンポポ組の佐藤先生が先導役でジーゼル先生がついて、二手に分かれて園庭見学がはじまる。

富田幼稚園は、すでに紹介したように（四月号参照）園全体が丘陵の南側斜面を活用して建てられているため、坂の上の広場と園舎を除いて、園庭全体がなだらかなスロープをなしている。正門を入ると三本の道が坂の上の広場に向かって走っており、真正面と西側の道は丘陵の斜面そのままのなだらかな坂道であるが、東側の道は途中まで平らで園舎近くで急なガケをなしている。この急なガケを利用してスベリ台が二本作られているが、その内の一本は登り専用で作られている。中央の太い道と両サイドの道の間に背の低い松の木の植込みがあり、その植込みの中に小道が走り、ジャングルジムやタイコ橋、シーソー等が点在している。東側は全体に植込みも低く、ガケ状になっているので一年中日当りがよいが、西側は大きな木が繁っている。「緑のトンネル」と呼ばれるほどよい日陰ができる。

二手に分かれた子どもたちは、年少のスマイレ組の子どもたちに送られて、レンゲグループは東まわり、タンポポグループは西まわりに、手紙などで話題になった箇所を中心に見てまわる。

レンゲグループは、最初広場をぐるっと見渡し、園舎をずっ

と見てからガケのスベリ台のところへ行く。

子ども(ザ)「あつノすべり台だノ」

「これからすべり台をすべりますよ。ちょっと急なんだけど大丈夫かしら?」

「気をつけてすべらなくっちゃあね」

「ウワッ!」「キャッ!」「コワイ!」

ザベリオの子どもたちは、はじめて見る急なすべり台をみて奇声をあげる。

「ザベリオのお友だちははじめてだから、富田の友だちは、しっかり手をにぎってやってね。順番に二人ずつすべりましよう。先生からすべりますよ」

相楽先生は真先にすべって、下から「どうぞ」と合図を送る。

短いけれど、スピードのつくすべり台をみて緊張もほぐれ、うれしそうに歓声をあげてすべる。次々勢いよくすべりおりてくるのを見ているだけでも肩に力が入り、うれしそうである。

「みんなすべりましたか?こんどは上に登っていくんだけど、ふつうの階段じゃないのよ、のぼれるかしら?」

「はいっ、ウワッ!」コンクリートのすべり台に子どもの歩中に穴が無造作にあげられているのだが、この見なれぬ階段を皆四つばいになって登っていく。

「へんなの。おもしろかったな!」

大急ぎで再びすべり台をすべってもう一度登ってみる子どももいる。一しよにすべり台をすべって気持ちげあつたのか、手をつなぎあっている者同士の話がはずんでくる。

子ども(ザ)「ぼくの名まえ知っているかい」

子ども(富)「ううん、知らない」

子ども(ザ)「お・の・ぎ・き・あ・つ・しつていうんだ」

子ども(富)「ボクはとみたで一ばんつよいんだ!」

広場から真正面の道を正門に向けてくだり、途中ジャングルジムやたいこ橋に登ったりして西側の「緑のトンネル」に入る。

「ここは、くりの木のトンネルです。くぐっていきますよ」

「ちがうよ。どんぐりだよ」いささかあがり気味の先生に、

富田の子どもは落ちついた調子で注意する。

「あつ、そうでしたね。先生よりもみんなの方がよく知っているわね。ハイックぐりますよ」

「ドングリの木のトンネルですって。まほうの木もあるかしら」

きく組の大塚先生が、手紙の中に出てきたまほうの木のことを思い出して歩きながら子どもたちに話しかける。

子ども(ザ)「あつ、まほうの木だ。だってこんな形になっているもん!」ここに足はさんだよ。きつと」

「きつとそうね。そうだわ。相楽先生、これですか? まほ

うの木って」という大塚先生の質問に、相楽先生はにっこりうなずいて「そうですよ」という。そして、皆で木にさわってみる。

一方、タンポポグループは広場の東側スミにおいてある青い自動車（廃車）から見ていく。

「これがね、手紙にも書いてあったと思うけど青い自動車です。富田のお友だちはこれにのってね、運転の練習したり、ドライブごっこをして遊ぶのよ」ザベリオには自動車がないので、自動車にさわったり、中を熱心にのぞきこんでいる。

「さあ、自動車みたらね。今度は坂をおりてまほうの木の所へ行きますよ」西側の木のおい繁ったならかな坂道をゆつくりくだっていく。ザベリオの子どもたちは大きな木を見あげながら「どれがまほうの木？」という。一しよに手をつないでいる富田の子どもは「あそこ、もつと下の方」と指さして教える。

「どうして、これがまほうの木かっていうとね。ホラ、ここから枝が分かれているでしょ？ 富田のお友だちがね、まだドングリの実が青いうちにまちきれなくて木に登ってとろうとするの。そんなとき、ちょうどここに足をささんじゃってね、なかなかとれなくなるの。何人もそんなふうになったわね」

「ぼく、なったの」

「○○ちゃんもなったんだよ」

富田の子どもは体験や友だちの体験を話す。「そんなになったらどうしてとるの？」ザベリオの子どもは不思議そうにきく。「そうね、なかなかとれなくてね」といいながら、先生は木にのぼって実演してみせる

「足を上からおしたり、下からおしてみたりしてやっとなれるの。足がいたくなるときもあるの」

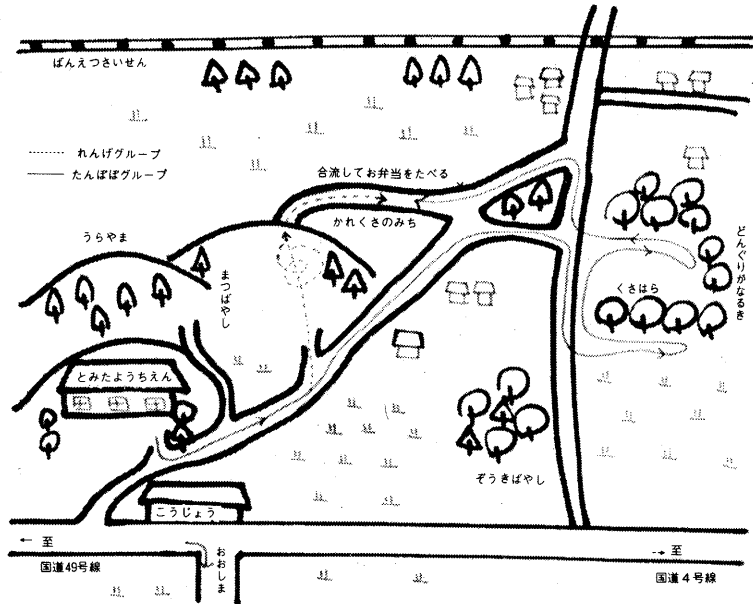
「ふうーん」

先生は木を見あげながら「もう、どんぐりの実なっていないよな」という。まほうの木を見終わると、真正面の道を広場に向けてあがり、両側の道と連がる丸木の階段をおりてすべり台の下に出る、さっきのレンゲ組とは逆に下から最初に登る。

「ぼくじょうずにのぼれるよ、ザベリオの人ひっぱってやっかな？」富田の子どもたちがじょうずにのぼるのをみて、ザベリオの子どもも一生懸命のぼる。上にあがると二人一組に手をつないでやはり歓声をあげながらすべってくる。本当に短いすべり台なのに心から楽しそうにすべってくる。

年少児がへやに入り、年長児とザベリオの子どもが園庭見学に出かけたあと、広場には宮沢先生が残り、次の活動木の実拾い——に必要なバケツやビニール袋の用意をしている。

十五分間ほどの園庭見学を終え、二グループとも広場に戻ってくる。裏山へ木の実を拾いに行く準備にとりかかる。予定



では、木の実を拾ってから全員そろって園庭でお弁当をたべ、一しよにゲーム等をする事になったのだが、予定より時間がずっと遅れてしまったので、木の実を拾った後、山でお弁当を食べ、帰る前に時間のゆるす限り全体で活動することに変更する。年少児はおみやげの松ぼっくりに色をぬる活動がつづいているので、そのままへやの中で活動をつづけ、年長児とザベリオの子どもたちだけで、さきほどのグループ毎に分かれて山に木の実を拾いに出かける。

林に行つて木の実をひろう

「それでは、ドングリ拾いに出発します！」

「スマレさん、キヨ子先生いってきます」スマレ組の子ども、先生に見送られて手をふりながら裏山へ向かう。

〈レンゲグループ〉

山へ行く途中にもドングリが落ちてきている。

「ひろってもいいですよ」

「あっ、あった！ あった！」富田の子どもは見つけるのも早いし、拾うのも早い。ザベリオの子どもも対象的である。

「大きな石がころがっているからころばないようにね」

山道にさしかかるところで、松林を指さしながら「あそこに林がみえるでしょ。あの林に行きます」浅黒い松林が目の前に広がり、草ぼうぼうの小道に足をふみ入れただけで充分冒險的な気分になってくる。その小道には花もさいている。

「黄色い花だ。むらさきの花もさいている」

「きれいだなあ」

松林にさしかかる子と、まつぼっくりが松の枝に点々とついているのが、青い空にはえて美しい。

「みんな、上をみてごらん。たくさん松ぼっくりがなっているのがみえるでしょ？」

「あつ、いっぱいあるう——」

「これから林に入ります。袋がいっぱいになるくらい松ぼっくりをひろってくださいね」

うす暗い、しめった林の中に入っていくと、先頭の子どもが突然「鳥の羽根だ」といって羽根をひろう。見るとあたり一面大きな羽根や小さな羽根がとび散っている。

「たかの羽根かな？ それともはとの羽根かな？」

「どうしてこんなところに羽根がおちているのかなあ」子どもたちは口々にこんなことをいいながら、羽根もひろって袋に入れていく。列の最後にいた富田の子どもが、羽根の中から小鳥

の首を見つけ出し「鳥がけんかしたんだ」というとその首をすて羽根を数枚ひろって皆の方へ走っていく。

「さあ、もう少し行くとたくさんおちているところがありますよ」ザベリオの子どもは、ものめずらしげにキョロキョロしている内に、たおれた松の木にぎっしり松ぼっくりがついているのをみつけて「ワァッ」と歓声をあげて夢中になってとる。富田の子どもは「向うにもっとあるよ」と落ちついたようすで通りすぎていく。

子ども（ザ）「先生ノ とげのある赤い実があるんだけどちょっときてノ」

大塚「あら、本当のバラの実だわ、お友だちにもおしえてあげたら」

子ども（ザ）「はっぱのうらにホラノ 赤い玉子がいっぱいついている」

大塚「何の玉子かしら。お友だちに見せてあげましょう。知っているお友だちがいるかもしれないから」

ザベリオの子どもも先生も木の実をひろったりいろいろな発見で忙しい。

林は十分もあるけばまた田んぼに出てしまうが、出口近くに小さな広場があってそこに松ぼっくりがたくさんおちている。富田の子どもたちはいつも来なれているので松ぼっくりをどん

どんひろつてはバケツに入れていく。時々、めずらしそうに松ぼっくりを見ているザベリオの子どもめずらしそうに見たりする。ザベリオの子どもは、両手にいっぱいひろう子、スモックのスソをまくつてその中に入れる子、二、三個手にもつて満足している子、ただだまつて見ている子等、さまざまである。ザベリオの女兒が富田の相楽先生に「先生、これ！」といって赤い小さな実を三個、手のひらにのせてみせる。

「まあきれい。そんな実もあつたの？」

「うん、あそこにあつたの」とうれしそうに話す。全員ひとつになつて木々とたわむれているようである。

〈タンポポグループ〉

幼稚園を出てなだらかな坂道をずんずんのぼっていく。

「この道をのぼっていくと、どんぐりのある林につくのよ。」



タンポポさん、ほら、いつか大塚先生からいただいたビスケットをたべた野原へ行くの。わかるわね」

「あー、あそこか。わかつたよ」

行く先は先頭の子どものまかせて、佐藤先生は列の後ろに位置しながら、ザベリオの子どもにも話しかける。

「ザベリオのお友だちくたびれない？ ずっと歩いているものね、足は元気？」子どもたちは大丈夫というようにコックリうなづく。

「大塚先生、どこにいるの？」

大塚先生は別のグループについているため、先生のとが気がかりだったのだろう。

「大塚先生は、もうひとつのきく組さんの方にいるのよ」ふりかえると、丁度もう一つのグループが林に入るところが見えたので「ほら、あそこにいるでしょ？ もう少しして、木の実をひろつたらまた大塚先生に会えますよ」というと、子どもたちは安心して元気に歩きます。やがて草原にでる。

「これがどんぐりのなる木ですよ。いっぱいおちているかしら？ ひろつたらバケツに入れてね」富田の子どもは「あつたよ」「この前より少ない」等と話しながら次々に見つめてはひろっていくが、ザベリオの子どもは探したりひろうのに忙しくて声も出さない。一緒についてきたジーゼル先生も一生懸命さが

している。

「コレキレイデスネ。トテモツヤガアツテ」大きめのどんぐりを指でこすって大切そうにもつ。バケツに半分ぐらいたまつたところで「この近くにもう少しどんぐりの落ちてるところがありますから、そこへ行きましょう」ザベリオの子どもたちにとっては、これでも充分すぎるほどのどんぐりであるが、富田の子どもはバケツ一ぱいひろうつもりなので、場所を変えてひろうことにする。20〜30メートルもいくと別の林につき、子どもたちは黙々とひろいつづけバケツにほとんど一ぱいになる。「たくさんとれたわね。もうそろそろお弁当にしましょうか。たくさん歩いたから、おなががすいたでしょうね。もう少し行くとふかふかの草がたくさんあるところがあるの。そこでお弁当にしましょう。きっと大塚先生や他のおともだちもきていま



すよ」

そのころ、レンゲグループも木の実ひろいをおえ、枯草のフワフワするあぜ道をお弁当をたべる場所に向かって歩いてた。やがて同じあぜ道をもう一つのグループがやってくるのが見えかくれる。「オーイ」「オーイ」と呼びかう声が、遠くにひびく。脱穀機のプーンといううなり声とともに秋空にこだまする。

(つづく)

